

書評「私の一冊」

マリリン・バトラー著

『ジェイン・オースティンと思想の戦い』

鈴木美津子

マリリン・バトラー (Marilyn Butler, Lady Butler, née Evans, 1937-2014) から受けた学恩は計り知れない。どの著作からも様々な影響を受けたが、とりわけ感銘を受けたのはジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) 生誕 200 年に刊行された『ジェイン・オースティンと思想の戦い』(*Jane Austen and the War of Ideas*, 1975) である。本書に関心を抱いたのは、「思想の戦い」という表題が実に新鮮で魅力的だったからである。当時の私の習慣で、見返しの遊び紙に、「1976 年 4 月 19 日」と購入日が記されているが、実際に腰を据えて読み始めたのは 1977 年の夏休み。灼熱の太陽が照りつける山口の地で、うだるような暑さと戦いながら読了した。本書が、1970 年代のオースティン研究にいかに大きな衝撃をもたらしたかを、彼女の他の著作にも言及しながら述べてみたい。

マリリン・バトラーの簡単な経歴を紹介したい。1958 年、オックスフォード大学セント・ヒルダズ学寮 (St Hilda's College) を優秀な成績で卒業後、ケンブリッジにあるパーズ女子校 (Perse Girls' School) の教員、BBC のプロデューサー見習いを経て、1966 年にマライア・エッジワース (Maria Edgeworth, 1767-1849) 論で博士号を取得。セント・ヒルダズ学寮の特別研究員となる。1973 年にセント・ヒューズ学寮 (St Hugh's College) に移り、特別研究員と個別指導教官となる。1986 年、ケンブリッジ大学のエドワード七世欽定講座担当英文学教授 (King Edward VII Professor of English Literature) に就任し (1993 年まで在職)、キングズ学寮 (King's College)

に所属。1993年から2004年まではオックスフォード大学のエクセター学寮（Exeter College）の学寮長を務める。オックスフォード、ケンブリッジ両大学でかつて男子のみの学寮の学寮長に女性で就任したのは、彼女が初めてである（Crick 319）。

主要単著は以下の通り。1972年、博士論文を纏めた『マライア・エッジワース—文学的伝記』（*Maria Edgeworth: A Literary Biography*, Oxford UP, 1972）を刊行。ちなみに、夫君で政治学者のサー・デイヴィッド・エッジワース・バトラー（Sir David Edgeworth Butler, 1924-）は、マライア・エッジワースの末弟マイケル・パケナム・エッジワース（Michael Pakenham Edgeworth, 1812-81）の曾孫にあたる。本書の刊行により、長らく忘れ去られていた作家マライア・エッジワースが蘇った。マリリン・バトラー自身には、ロマン主義研究の第一人者への道が拓かれることになる。本書は、翌1973年に英国学士院のローズ・メアリ・クロウシェイ賞（British Academy's Mary Rose Crawshay Prize）を受賞。2年後、『ジェイン・オースティンと思想の戦い』を刊行。内容に関しては後述する。4年後、小説家、詩人、風刺家のトマス・ラヴ・ピーコック（Thomas Love Peacock, 1785-1866）の評伝『羽根を広げたクジャク—文脈に現れる風刺家』（*Peacock Displayed: A Satirist in his Context*, Routledge, 1979）を発表。2年後、『ロマン主義者、反逆者そして反動主義者—英文学とその背景—1760年から1830年まで』（*Romantics, Rebels and Reactionaries: English Literature and Its Background 1760-1830*, Oxford UP, 1981）を刊行。本書は、様々なジャンルに属する多様な作品を、正典、非正典を問わず、軽重をつけず、一堂に並べて分析するという当時としては極めて斬新な手法を取り入れ、「画期的で新しい種類の文学史」（Glen, Preface viii）と賞賛された。

死後2年たった2016年、1984年に完成していたが未刊行のままになっていたタイプ原稿が偶然発見される。友人で同僚だったヘザー・グレン（Heather Glen）の編集により、『神話の地図を作成する—18世紀英詩と文化史における逆流』（*Mapping Mythologies: Countercurrents in Eighteenth-Century British Poetry and Cultural History*, Cambridge UP, 2015）が、死後出版される。2016年7月22日付けの『タイムズ文芸付録』（*TLS*）に、パメラ・クレミット（Pamela Clemit, 1960-）による書評が掲載される。書評の表題は「ロマン主義研究の／ロマンティックな反逆者」（‘Romantic Rebel’）である。この表題は、マリリン・バトラーの文学批評の姿勢を余すところなく伝えている。彼女はまさしくロマン主義研究における反逆者であった。

ハロルド・ブルーム (Harold Bloom, 1930-2019) やノースロップ・フライ (Northrop Frye, 1912-91) などに代表される、歴史的文脈を無視した70年代の批評の趨勢に毅然と異議を唱えたところにも、その片鱗は窺われる。パメラ・クレミットは「マリリン・パトラーの創造的な意義申し立ては、ロマン主義研究に静かな革命を巻き起こした」(Clemmit 11) と指摘する。反逆精神は、父サー・トレヴァー・エヴァンズ (Sir Trevor Evans, 1902-1981) 譲りであろう。彼はウェールズ出身のジャーナリストで「毎日1200万人の人々のために記事を書いた男」(Crick 220; Glen xxv) として知られ、彼の記事は当時強い影響力をもっていた。炭鉱労働者から身を起し、デイリー・エクスプレス (Daily Express) 紙の産業記者となり、産業欄の編集主任を37年間務め、最終的には同社の取締役になった。マリリン・パトラーの実兄リチャード・エヴァンズ (Richard Evans, 1935-) は、自分達兄妹は労働党の政治思想を父に教え込まれたと回想している (Crick 214)。長じて、兄リチャード・エヴァンズは『フィナンシャル・タイムズ』(Financial Times) 紙の政治記者になり、マリリン・パトラーは1960年代に新左翼と関わりを持つようになる (Crick 214; Glen ix)。

『ジェイン・オースティンと思想の戦い』はいかなる著作か見てみよう。本書は2部に分かれている。第1部「小説と思想の戦い」は全5章から成る。第1章「感傷主義—急進主義的伝統」、第2章「急進主義小説Ⅰ—革命と理性」、第3章「急進主義小説Ⅱ—『ケイレブ・ウィリアムズ』と『ハームスプロング』」、第4章「保守主義者」、第5章「マライア・エッジワース」となっており、章題からある程度内容を窺い知ることができる。第1部では、歴史に埋もれ、半ば忘れられていたロマン主義時代の小説を多数取り上げ、急進主義小説 (Jacobin novel) と保守主義小説 (anti-Jacobin novel) に大別する。この時代の小説にはすべて政治的メッセージが潜んでいることを検証し、小説は作家のイデオロギーを伝える重要な手段になっていると指摘する。とりわけ、女性作家は、小説という媒体を自己の抱く政治的・宗教的・社会的信条を発信、表明する場として利用してきたことを見事に跡づけている。いわば、当時の小説は作家に「思想の戦いの場」を提供しているのである。

第2部「ジェイン・オースティン」は全8章から成る。第2部で、瞠目すべきことは、当時一般的だったオースティン像、すなわち、彼女が生きていた18世紀末から19世紀初頭の重要な出来事に全く関与しない、いわゆる「時代を超越したジェイン・オースティン」像に異議を申し立てたこ

とである。第1部「小説と思想の戦い」での議論を土台にして、ジェイン・オースティンの小説を歴史的・政治的・社会的コンテクストの中に位置づけ、作品を仔細に読み解くことによって、ジェイン・オースティンと彼女の生きた時代の関わりを実証的に跡づける。そうすることによって、彼女が19世紀初頭の政治や社会のありように関心がないどころか、当時の思想の戦いや論争に巧妙に密かに関わっていたということを明らかにする。保守主義小説と急進主義小説の特徴に照らし合わせると、ジェイン・オースティンの小説は保守主義陣営 (conservative camp) に属すると結論づける。ただし、11年後には、主張を多少和らげ、後期の作品におけるジェイン・オースティンは、ジェントリー階級が信奉している保守的な立場よりはむしろ、自分の人生を独力で切り開いていく海軍将校の兄弟達の属する革新的な立場に共感を抱くようになったのではないかと軌道修正している。

刺激と洞察に満ちた『ジェイン・オースティンと思想の戦い』を読了後、研究生生活の大半は、マリリン・バトラーの著作において言及され、論じられた膨大な小説群を読破することに費やされたと言っても過言ではない。マリリン・バトラーに私淑したおかげで、ロマン主義時代の小説についてきわめて多くの知見を得たことは、実に幸せなことだったと実感している。

参考文献

- Clemit, Pamela. 'Romantic Rebel: A Reimagining of the Literary Map of Eighteenth-Century Britain by a Proud Member of the Awkward Squad.' *Times Literary Supplement* 22 July 2016, p.11.
- Crick, Michael. *Sultan of Swing: The Life of David Butler*. Biteback P, 2018.
- Glen, Heather. Preface. *Mapping Mythologies: Countercurrents in Eighteenth-Century British Poetry and Cultural History*. By Marilyn Butler. Cambridge UP, 2015. pp. vii-xxv.